

別府の伝説

悲しい女の性さが

故 堀 藤吉郎

底無し湊に身を投げたお清

別府八景の一つとして有名な河内溪谷が市の南端にある。流れは朝見川に注いでいるが、この溪谷の入口に天

長山修福寺という寺がある。この寺とともに昔は修福寺の境内にあったという地藏尊が河内川を挟んで西岸にある。付近一帯の名を堂籠どうもりとか堂籠谷と呼んでいる古いところである。

別府の町の分限者幸右衛門の一人娘にお清というものがあつた。一人娘のこととて蝶よ花よと父母の愛を一身に受けて成長した。しかし、大きくなるにつれ容貌がすぐれず、年を重ねるにしたがつてますます醜い面相となってくる。娘はこのため無常を感じるようになり、なんとか器量よしになりたいと、浦田の修福寺の地藏尊にお参りして信仰によって自らを慰め、十九の春を迎えた。父母は娘の心を明るくするために養子でももらつてはと、いろいろとよい条件を付けて婿選びしたが、縁談はどれも破れてしまった。

悲運の涙にくれたお清は、ますます地藏尊を信仰するようになり、二十七才のときの一夜、菩薩の夢を見た。もう何も考えずただ菩薩に一生を捧げよう、そして、世俗の不幸な人々の救いとなり、醜くなるものには美を、短命のものには長寿を、子のないものには子を与え、諸

願成就を得さしめ給えと大願を立てて浦田の地藏尊に日夜お参りを怠らなかつた。

両親もお清の悲しい心情を汲んで人目を忍んで涙にくれる日が続くようになった。

六月十四日の深夜、おりから朝見山に傾きかけた月を全身に浴びて、川沿いの小道を踏み分けて行く一人の女があった。やがて女の足は浦田の地藏尊の祠の前に止まった。地藏尊の前に頭を下げて伏し拝むと橋を渡って河内谷の細道を登っていった。もうこの辺りは河内谷の崖にさえぎられ、木の間を通してさす月明りだけである。

娘は谷に降りて侵食された岩盤を飛び石伝いに、底知れぬ淵の前に立っていた。月の光を吸って不気味な静けさを漂わせている魔の淵、女は恐れる色もなく櫛やこうがい下駄などを石のうえにおき、「南無地藏尊頓生菩薩」の声を残すとさっと身お躍らせて淵の真ただ中に身を投げてしまった。

波紋が消えたあとには、月のさす青白い水面が生物の呼吸をするように動いていた。女の姿は再び水面に浮かび上がってこなかった。

こういうことがあって後、その淵え釣りに行くと鬼女が出ると思えられ、里人はこの淵をき鬼女ヶ淵、この淵に落下する滝を鬼女ヶ滝と呼んでいた。里人はお清が鬼女になって現われないように、修福寺の業海禪師に訴えたので、禪師はこの滝壺に立って観音經を誦読し、お清の霊を淵に沈めたため鬼女の姿を見ることはなくなったというのである。

お清の投身した底無し淵は浅く埋まってしまったが、付近に不動尊が祀つられて、行者が鬼女ヶ滝に打たれて荒行をしている。

由布川溪谷の龍となった長者の娘

由布、鶴見の両山峡に源を発して流れる黒川が、川勢を増して大きな谷を作り、別府市と大分郡を境して賀来に注ぐ大峽谷がある。

昔弘法大師がこの付近を巡錫の折り、朴木の部落と詰の部落の人々が仲が悪く喧嘩ばかりするので、わしが喧

嘩をしないようにしてやると言われて錫杖で地面に一線を引いた。すると、それ線がだんだん大きく割れて深い谷ができたため、橋がかけられず行き来ができなくなつてしまったという伝説がある。

府内より湯布院に通ずる官道の桃川のほとりに、桃川左衛門という長者夫婦が住んでいた。人々はこの長者を桃川長者と呼んでいた。しかし、何の不自由のない長者も跡目を継ぐ子どもがなかった。

ある日、二人は日頃信仰するご靈験あらたかな黒川地の蔵尊に願をかけて帰る道すがら、子どものお話をしていると付近の草むらの中で赤子の泣く声がした。声をたよりに探して見ると、玉のような女の子が置いてあった。「きっと子どもがほしくて願掛けをした私たち夫婦に、地藏様が授けてくれたのかもしれない」

と、二人は喜んで赤子を抱いて帰った。それからこの子に美子と名付け、蝶よ花よと大事に育てた。

美子のあまりにも美しさと賢かしさは里人の評判となり、年月は巡って十七才の春を迎えた。その三月三日の夜のことである。美子は昨日までと違った悲しい涙をためた

声で、

「永いあいだ大恩をうけたご両親さま。私は猪の瀬戸の山奥に住む大蛇の子でございます。龍になりたいと一時人間の姿に変わって十七年、今こそ本当の龍になるとが出来ました。これから水魔の滝壺に入ります。お育て下さいましたご両親さまには随分ご苦労をおかけしました。どうぞ、これまでの縁とお許しください。さようなら」と別れを告げた。

驚いた両親は、美子の袖を力一ぱい引いたが、神通力を得た大蛇の子は脱け殻となって消えてしまった。両親は唾然としてしまったが気をとりもどし、椿村の下にある水魔の滝壺のうえに立って「美子やもう一度顔を見せておくれ」と、声をかぎりに叫んだ。その時滝壺から声があつて、

「美子はもう人間ではありません。今の私の姿はお見せできませんが、今から三年後この滝壺より十丁ばかり下流の滝壺に、私の生みの親の大蛇が来ることになっていますので私もその滝壺に移ります。その時一寸でもお父さんお母さんに人間としての最後の姿をお見せしま

す。この滝壺は今後人間にはお見せしません、どうぞお帰りくださいませ」。

と言うが早い大きな岩が滝のうえの岩の間に挟まって滝壺は見えなくなっていました。

夫婦はその後寂しい生活をおくっていたが、三年後のある日の真夜中、戸口で人を呼び声がするので出てみると美しい女が一人立っていた。

「今じぶん娘さん一人でこんな山奥に、あなたは何処の方ですか。道にでもお迷いですか」と問うと、「私はお二人に育てられた美子の妹です。これは僅かなものですが姉様からの贈り物です、どうぞお受け取りくださいませ。つきましては明八月十五日の子の下刻に朴木村の笹葉の淵へお越しくださいませ。お願い申します」といって門口を出て行ってしまった。夫婦は夢ではないかと贈り物をよくよく見ると、小判や大判を入れた千両箱が置いてあった。

夫婦は、三年前、水魔の滝での美子のことを思い出した。翌晩子の下刻満月の光の下を笹葉の滝壺を尋ね、「美子や美子や」と声をかぎりに叫び続けると、ザーと

いう水音とともに滝壺から「はい、美子です。只今まいります。」と返事が帰ってきた。月あかりにすかして見れば、滝壺に浮かぶ美しいわが子美子の姿があった。

「ご両親さまこれが美子の人として最後の姿です。もう千年も万年も人間の姿になることは出来ません。どうぞお体を大切にしてお忘れください。それではおいとま申します」と、ことばのおわらない内に滝の両岸は巨岩におおわれて見えなくなった。

美子が入水したと伝えられる水魔の滝は、今では目暗滝と呼ばれ蛇の淵と呼ばれる恐ろしく暗い滝壺である。これは猿渡橋より上流の話で、下流の美子が再び人間の姿となって現われた滝は、大岩石に挟まれて二面から落下する滝で、恐ろしいまでに暗黒の滝壺で洞窟をなしている。

長者の屋敷跡は長者原という地名で今に残っている。

竜神の怒りにふれた長者の娘

神功皇后が三韓を親征された時に、九尋の軍船を皇后

に献じた和爾部の一族は、はるばる志高湖のほとりに移住し、船原の長者とか志高の長者と呼ばれた。子孫は代々末長く続き栄えた。和爾部の藤彦の代となつてからも豪華な生活が続いた。この長者には美しい一人娘があった。健やかに成長してやがて恋を知る頃ともなれば、美しい月の冴えた夜には志高湖の湖に船を漕ぎだして大和琴を奏でるなど、清々しいまでも恵まれた日々をおくっていた。

ある蒸し暑い真夏の夜、月のもののある日に娘は船を乗り出そうとした。両親は、このような日に湖にできれば志高湖の主の龍神の怒りに触れて恐ろしいことが起こるといふ言い伝えを話して戒めた。しかし、娘は聞き入れず両親のすきをみ、侍女をつれて湖に船を浮かべてしまった。

真夏の月はさえぎる雲とてなく湖面を照らし、小波は金波銀波となつて美しい情景である。ときに、一陣の魔風が起こり怒濤は天に沖し、天は、ために暗黒となり、侍女諸共に娘は湖底深く沈んでしまった。それきり娘の姿は湖面に現われなかつたのである。

これは志高湖の主龍神が不浄をきらつて、娘と侍女の体を抱いてどこかへ連れさつたのだといわれる。

湖畔の船原の山中には長者の屋敷跡というものが今に残り、長者代々の奥津城という墓石が寂しく点在している。志高湖東無田という所には長者井戸というものがあり、今でも清水が湧き出している。この水を飲むと金持ちになると語り継がれている。

貞婦を助けた身代わり阿弥陀

朝見川岸に庚申仏という地名がある。今の立田町の一地区である。この川端付近一帯は実には寂しく民家は一軒もなく、三抱えもあろうかと思われる大木が一本あったが、大正初期に落雷で枯死し倒れてしまった。

むかし、太宰府からの官道の西海道にある敵見郷長湯駅（今の永石通り六丁目付近か）に、日名子三依といひ、駅家の長と伯楽を業としている男が住んでいた。彼は、永の病の床につき、回生の望みも断たれ死を待つばかり

の重病人であった。妻は、夫の病が日増しに重くなるにつれ、神仏に願をかけるより他に道はないと思うようになり、田島田井の大宝籠山阿弥陀寺に深夜詣りをはじめた。

妻の信心のお陰か夫の病は日に日に快方にむくと、口さがない近所の話し声が三依の耳に入るようになった。

「夫が病気だからといって、もう一年も前から毎夜家を留守にしている。あの器量では男が出来ても不思議ではない」

三依はこの話を聞くと眼がくらみそうであった。絶望と憤怒に燃え、狂暴の風が胸を揺り動かして行く。夜風は寒い。川端にはもう夜露が草葉に降りている。三依は刀をしっかりと握りしめたまま大木の陰にかくれて妻の帰りを待っていた。暗闇に川向こうから土橋を渡ってくる女の足音、妻の影が近づくのが見えた。

「やい売女、くたばれ」、同時にキャッと叫ぶ断末魔の悲鳴。

三依は血刀をひっ提げて一目散に我が家へ帰るなり、床の上に気を失って倒れてしまった。

やがて眼が醒めると、三依は妻の腕に抱かれていた。

「おまえは幻か、幽霊か」、三依は生きた心地なくただ震えるばかりであった。キャットという悲鳴とともに倒れた妻。血潮のついた拔身の刀……かすり傷一つ負わず帰ってくるとは、

「おまえ、庚申仏の大木のところで何か変わったことはなかったか」

「そういえば、何だかあそこで背中に冷水を帯びせられたような気がしてうち倒れました。ほどなく気付いて今帰ったところです。遅くなってすみません許してください。」

いよいよ不思議な出来事である。三依は観念して妻に一切をうちあげ二人で庚申仏に行ってみると。地も草も石も一面に鮮血に染められ、血潮は道を伝ってのびている。血痕を伝っていくと阿弥陀寺の山門から御堂の中へ仏壇へと続いている。二人は恐る恐る如来像を仰げば、阿弥陀如来の背中は袈裟掛けに斬られ、血潮を浴びているではないか。三依は妻と手を取り男泣きに泣き、妻の貞節と仏の靈異を感じ、心から帰依し念仏の生活に入る

た。

当時の人々は、大宝籠山阿弥陀寺の本尊を身代わり阿弥陀と称して信仰するようになった。現在山田区の長松寺の山門を入ると境内の南側に身代わり地蔵を安置した御堂がある。靈験あらたかな仏として願掛けのために参詣する人が多いということである。

永遠の処女式子内親王

金比羅公園を抜けてケール楽天地へ通じる山の手道路の一出の部落からの道を登ると、竹藪のなかにある大きな真榊の木の西側に石を積み重ねているところがある。承如法御茶毘所跡といわれている地である。後白河天皇の第二皇女、加茂の齋院准三宮式子内親王、後の尼僧承如法の遺骸を茶毘にふしたという奇しくも悲しい聖処女の伝説が今に語り伝えられている。

「玉の緒よ絶えなば絶えね長らえば 忍ぶることの弱りもぞする」

百人一首の歌人式子内親王は、天皇が即位された時加茂の神に仕えるに齋院として、清浄無垢の身体を神に捧げることになった。

やがて、姫の前に男性が現われる、惟明親王といわれる高貴な皇子である。しかし、二人の間には神の掟が垣根となって張りめぐらされ、歌を通じての交わりでしかなかった。病のため十一年間の齋院を退下して大炊御門齋院となったが、一度神に捧げた身は俗界に帰ることを許されなかった。

巡る春はまた訪れた。内親王にも老いらくの恋が芽生えた。蔵人兼仲を知る仲となったが、何にもいえぬまま激しい情熱もやがて嘘のように冷えていった。姫はつくづく世の無常を悟り永遠の救いを仏に求め、剃髪して尼僧承如法となって仏門に入った。承如法は、豊後の國主大友能直の内室早風禪尼創建の尼寺である豊後立石村の観海寺に下り、静かな信仰生活にはいることができたのである。

建仁元年正月二十五日、承如法は齋院に任じられて四十二年、六十有余歳を一期に此地より仏の国へと永遠に旅立ったのである。